

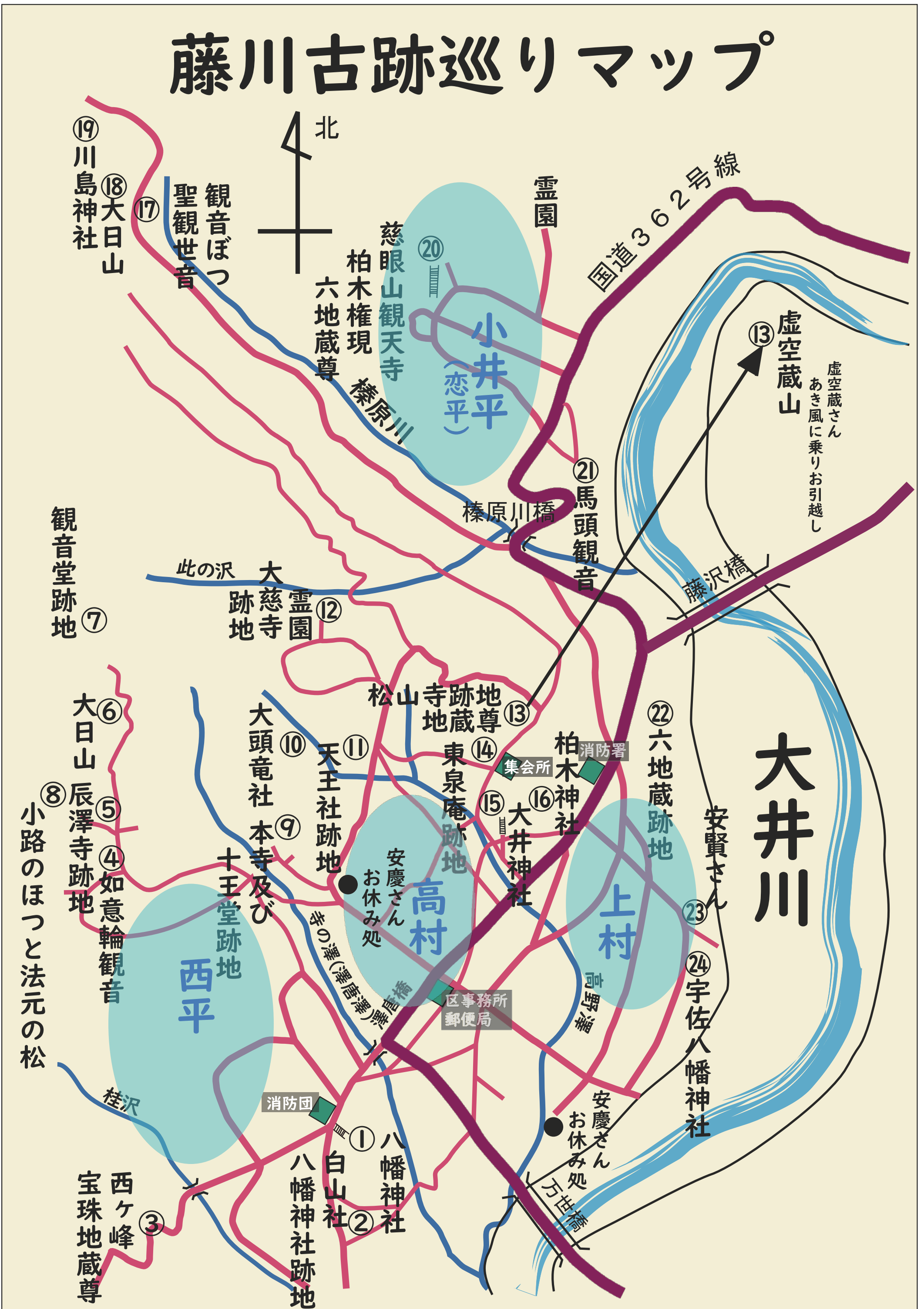
ふる里再発見

遠州藤川村古跡探訪記



遠州藤川村
(現在住居表示は元藤川)

藤川古跡巡りマップ



— はじめに —

今年、新型コロナウイルスが中国武漢市で発生し、瞬く間に全世界に拡散してしまいました。

日本でもその影響は深刻で、全国に緊急事態宣言が発令され、行動の自由が制限されることとなり、観光旅行など厳しい状況となっています。

このような時だからこそ、外に目を向けるのではなく、もう一度地域を見つめ直す「ふる里再発見」のいい機会だと思います。この冊子を活用して、古跡巡りをして往時を偲び、これからのことを考えていただければ幸いです。

最後に故高本鷹一様の多くの資料を提供いただき、作成作業にご協力をいただきました高本たつ江様に感謝申し上げます。

令和二年十二月 藤川区長 西村一

この度、藤川区の皆様のご理解を頂き、亡父の私記（郷土史）を発行することができました。亡父にとってこれ以上の喜びはありません。区の皆様方、出版にあたって尽力して頂いた関係者の皆様に心から厚くお礼申し上げます。

この冊子は、過去の文献、古老の方々の口碑、伝承や地域の資料所蔵者の協力のもと、出版することができました。重ねてお礼を申し上げます。

藤川の奥深い歴史や文化と伝統、ふるさとの風景を大切にしていくなかで、子供達と共に未来に繋げていきたいものです。

まずは「知ること」からでしょう。古跡めぐり令和の正に「門出」です。

追記・・・最後の出筆となった『遠州藤川村古跡探訪記』は、「鉄道唱歌」の替え歌集となっている事を、父亡き後発見しました。又ご紹介できたらと思っています。

令和二年十二月 高本たつ江

ふる里再発見 遠州藤川村古跡探訪記 目次 頁

藤川古跡巡りマップ	1
はじめに	2
目次(このページ)	3
高本鷹一 遺稿	4
ここでクイズです	5
① 八幡神社	6
② 白山社	6
③ 西ヶ峰宝珠地蔵尊	7
④ 如意輪観音菩薩	7
⑤ 辰澤寺跡地	7
⑥ 大日山	8
⑦ 観音堂跡地	8
⑧ 小路(コージ)のほつと法元の松	8
⑨ 本寺および十王堂跡地	9
⑩ 大頭竜社	9
⑪ 天王社跡地	9
⑫ 霊園及び大慈寺跡地	10
⑬ 松山寺跡地と地蔵尊	10
⑭ 東泉庵跡地並びに観世音石碑	10
⑮ 大井神社並びに天神社	11
⑯ 柏木神社	11
⑰ 観音ぼつ 聖観世音	12
⑱ 大日山(日向山)	12
⑲ 川島神社	12
⑳ 観天寺、柏木権現、六地藏	13
㉑ 馬頭観世音	13
㉒ 六地藏跡地	14
㉓ 安賢さん	14
㉔ 宇佐八幡神社	14
おわりに	15

この冊子は、川根本町ホームページの社会教育課・社会教育室のページに掲載しています。右のQRコードを読み取ると、閲覧・ダウンロードをすることができます。



高本鷹一氏（故人）は平成二十五年「遠州藤川村古跡探訪記附録」を書き上げました。郷土史関連ではこの冊子が最後の出筆となりました。今回はこの冊子を参考に「ふる里再発見 遠州藤川村古跡探訪記」という形で復刻しました。元となった「遠州藤川村古跡探訪記附録」の表紙と後書きを最初に掲載させていただきます。

* 本文中において「京丸」が数カ所記載されております。これについては、歴史や伝説が今なお残されており「遠州七不思議」の一つと言われ諸説があります。

平成二十五年三月作成

遠州藤川村古跡探訪記附録

高本鷹一（九十七歳）

終わりに

戦国時代を経て人々は苦しい生活の中で子弟の教育におろそかとなり、この藤川村も「文書空白文盲時代」が続きました。そんな中で古老の口碑は「遠い昔の藤川は藤原の里」と呼んだという漠然としたものでした。其の後、藤原郡誌（五五）十三版の「藤原の里」に関する記録に触れ、私の三十年に亘るふるまとの古跡探訪が始まりました。その見聞の一部を、この冊子といたしました。不備や誤脱が多々ある事と思えますが、次世代の方々に少しでもご参考となりますれば幸いです。

* 文盲（もんもう）という言葉は現在には使われていないようです

高山の本道ゆかば鷹一羽白き腹見せ悠々と舞う

ここでクイズです

正解しても何もでないよ

ごさまたち
お子様達へ

きみ れきしはかせ
君も歴史博士になろうね!

探検の
始まり始まり

⑤ 大頭電神社は
何の神様?

① 八幡さんは
どこにある?

⑤⑥の答えは
『おまじない』を
よんでね

② 右足を踏むと
左足を踏むと
どちらの
観音様?

⑥ あんげんさん
は誰でしょう?

観音様
の願ひ
をしよう

③ 馬頭観音さんの
顔の上には
何がのっている?

おまじない
をしよう

④

大井神社に
山犬の石像
いくつある?
耳はどんな形?
書いてみるね
どこから運んできた?



冊子内のイラスト・手書きの文章は、
高本鷹一・高本たつ江さんによるものです

ぬり絵

年 月 日 なまえ

藤川古跡巡りマップ



①八幡神社

創設年度不詳。祭神ほんだわけのみこと誉田別命(第十五代応神天皇とされ、これが八幡神)。祭日十月五日。寛文二年(一六六二)検地、除地高二斗四升五合を給せられた。祭主、中西藤作。寺社統廃合により帳簿上は明治七年六月二十三日大井神社に合併合祀となり、八幡社は現地に移転したものと考えられる。

*除地 江戸時代? 寺社の境内や、無年貢証文のある田畑・屋敷など特別な由緒のある土地で、従来は検地を受けなかったが、次第に検地の上で検地帳に年貢(税金)を収めなくてよい土地(除地)として登録されるようになった。除地高はその割合。

②白山社、八幡社跡地

白山社は創設年度不詳。祭神伊邪那美命(いざなみのみこと)。除地高は藤川村最高十二石二斗二升が給せられていた。八幡社と同じ境内に勧請鎮座となっており、祭日は十一月五日。明治七年六月二十三日大井神社に合併合祀となっている。祭主百姓善右衛門。徳川幕府の直轄であった遠州は対岸の駿河より数十年も検地が遅れていた。其の關係で庄屋としては対岸の検地の状況をよく調べ、既成神社として白山社を創設、最高位の伊邪那美命を神として祀り村の税金を減じたのではないか。

藤川古跡巡りマップ



④ 如意輪観音菩薩

今から二百数十年前明和二年辰澤寺(しんたくじ)の境内に二人の女性により、この如意輪観音供養塔が建てられた。明治六年六月十五日統廃合により観天寺合併の際高田家の茶園に残されたもので、近隣の信仰を集めている。又昔京丸に通じた尾呂久保街道入口でもあり、何か不思議な縁の綾を感じる次第である。



③ 西ヶ峰宝珠地蔵尊

旧馬道(うまみち)は水川を経て金谷に通じる唯一の川根街道。二百年前は全部人の肩に乗って荷物が運ばれていた。明治初年まで川根地方も山犬(狼のこと)が出没して人馬を襲った。村へもう一步といふところで山犬に噛み殺された人を哀れんで享和元年(一八〇一)甚三郎さんが建立したと植田家の記録にあり、石碑には玄之丞(げんのじょう)と忠太郎の文字が見える。今は頭を失った地蔵さんが宝珠の玉をしっかりと抱いて立っている。

*宝珠 意のままに願いをかなえる宝ー如意宝珠



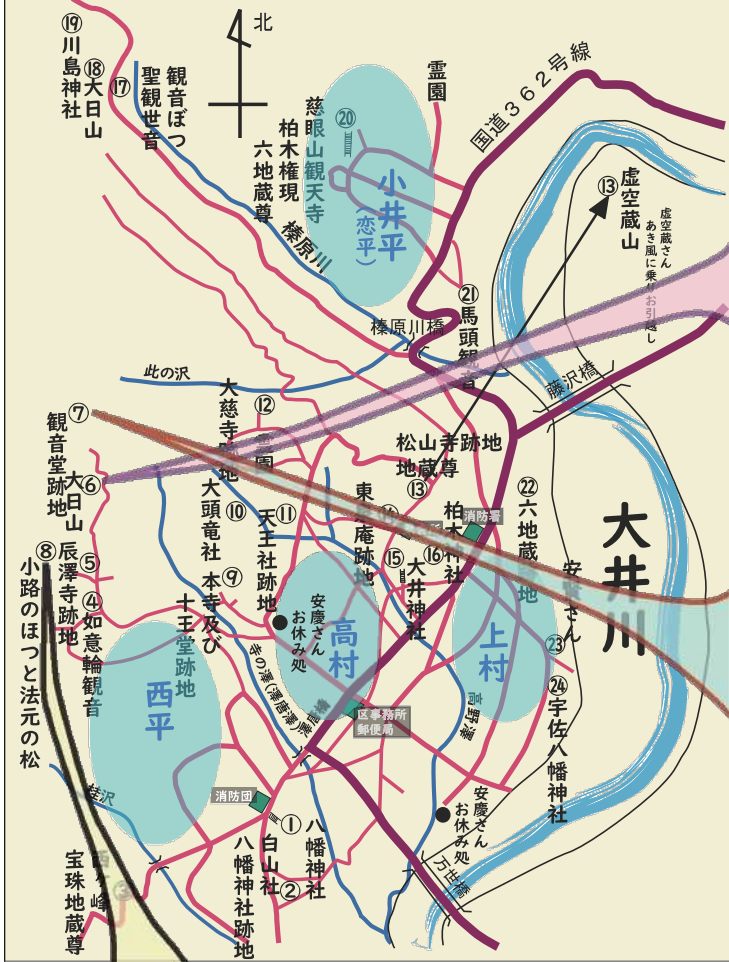
⑤ 辰澤寺跡地

辰澤寺は観天寺末寺。創設年度不詳。本尊は十一面観音菩薩。除地高三百文が給せられていた。土地二反歩。旧寄附人山田九平となっている。明治六年六月十五日統廃合により観天寺に合併した。この寺の最終住職「泰燐」と云う僧が現在の高田商店の祖先と聞いている。寺屋敷は杉木立となり石垣が僅かに往時の面影を留めている。

*寄附人 元々土地所有者は寺社だったという話もあり、そうであれば土地を寄附したというより、返納した返納人ということになる。この冊子では、一応寄附人で統一した。



藤川古跡巡りマップ



⑥ **大日山**
 観音山街道中腹にあり。観音堂の道案内とも云われた。^{そまひと} 仙人の信仰を集め又憩いの場でもあった。この土地に「折り柴」の習慣があつて毎朝山仕事に登る人たちの捧げる折柴が大きな御神木である。苔生した杉の木の本元に処狭しと挿されていた。御身体と思われる馬蹄石が置かれ、その周囲に穴あき石が沢山吊されていた。仙人山から材木を切り出す人

⑦ **観音堂跡地**
 創設年不詳。寛文二年検地当時観音領として除地高三百文が給せられていた。廃堂の折に本尊は庄屋善右衛門宅へ、山犬の石像一対は大井神社に移管されたと伝えられる。屋敷と思われる平は四畝歩(せぶ)もあり、見晴らしよく北方は藤代方面、平栗、坂京、小長井など南は家山附近の「のろ火」まで見える。現在は杉林となつており石垣の一部が僅かに名残を留めている。

⑧ 小路(コージ)のほつと 法元の松

「小路のほつ」は尾呂久保を経て京丸に通じた。口碑の一つとして、千百年ほど前、藤原一族が新天地を求めて進み広大な藤川、徳山の平地を見付けて藤原繁栄の地「藤原の里」と決めた所という話がある。尚「朝日さし夕日輝く青木の下に黄金百万宝かずかず」という古歌が旧家にあつたとか。終戦と共に枯れた松も骨格を残して立ちおり。学者の推定によれば樹齢八百年とか。

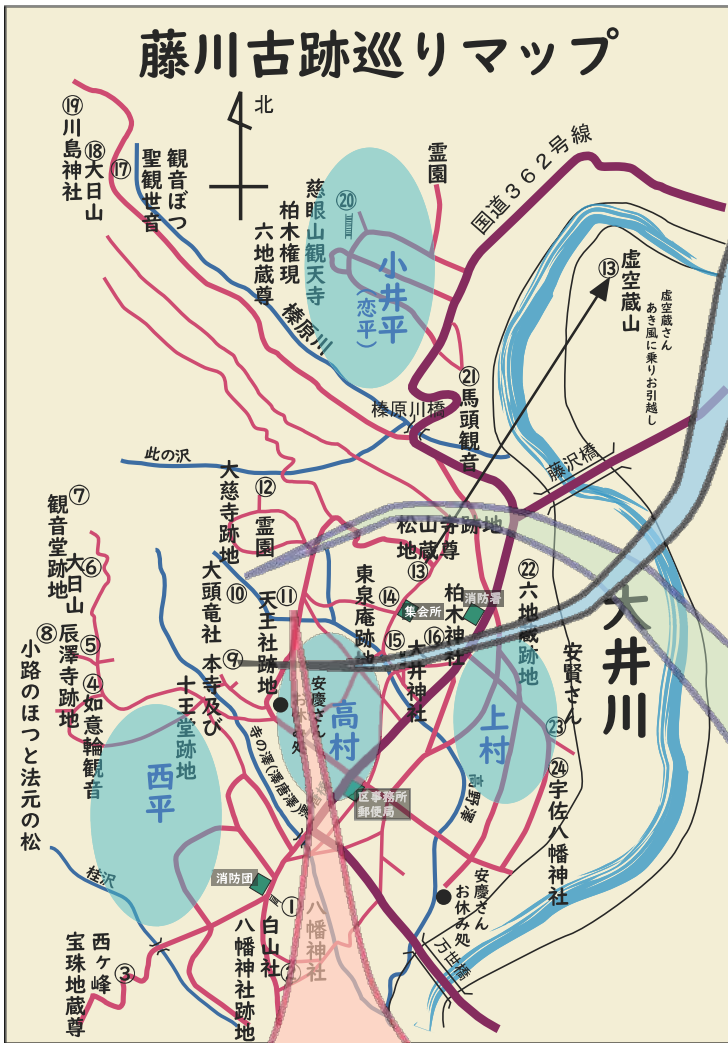
- * ほつ峰のこと
- * 京丸 春野町の地名 藤原一族が住んでいた。前述の「藤原の里」の話は、京丸の藤原一族と結びつけたものだろうが、真偽は分からない。
- * 口碑(こうひ) 古くからの言い伝え
- * 法元の松 「心霊清浄」を唱える信者が昭和の初めごろ名付けた(中川根のむかし話より)



法元の松附近から藤川を望む



木漏れ日の中の法元の松



⑨ 地跡堂王十よびお寺本
 島田千葉山智満寺は比叡山天台宗山門派の末寺として栄えて来た。そして島田より川根の末寺へ七百三十年に亘り宝燈を灯したと云われる。大泉院の末寺が藤川に在っても不思議ではないが、徳山城落城後一切は消え去り、本寺の由緒も一切不明。検地の時点で建物は跡形もなくそこに十王堂一字(一棟)が残っていた。この十王堂に三十六文が給せられた。尚西側を流れる沢を「寺の沢」といい地元の字を寺本という。

⑩ 大頭竜社
 創設年度不詳。祭神奈良県桜井市三輪町三輪山鎮座「大神社」を勧請分霊し奉斎大頭竜社と称す。沢村家守護神。祭主沢村明徳。ご神体として藤原姓入りの鏡がある。寛文検地の時、個人の屋敷内に在った為、除地の対象にならなかつた。藤川には他に柏木神社や宇佐八幡神社などがある。

⑪ 天王社跡地
 創設延喜十二年十二月七日。祭神素戔鳴尊(すさのおのみこと) 宇守本鎮座除地高一石三斗六升五合が給せられていた。代々神田家が神主を勤められてきたが、明治四年十一月四日夜不審火により焼失。御神体は神田三郎平さんが奉持し自宅に祀られていた。寺社統廃合により帳簿上は明治七年六月二十三日大井神社に合併合祀となつている。
 明治四年十一月四日夜燃え盛る大井神社を遠くに眺めた神田三郎平さんが天王社危機を感じ急遽社にいたり御神体二個、棟札(むなふだ)を奉持して自宅に帰り振り返ったときには、天王社も森も紅蓮(ぐれん)の炎に包まれていたという。難を逃れた御神体は、以来百数十年神田家に祀られていた。御神体は三面天皇といわれ正面左右に同じ顔が三つあり組み立て式人形で鎌倉時代の作とか。立派であった。
 現在(令和二年)は、残念ながら存在しない。



藤川古跡巡りマップ



⑫ 霊園及び大慈寺跡地

創設不詳。宗派不明。敷地三畝三十七步除地高一石二百文が給せられた。支配人神田三郎となっており寛文二年には住人「与市」の記録がある。
 霊園は明治六年共同墓地として開園されたと伝えられる。それまでは、家の近く畑や山や屋敷内などに葬り祀られていた。

⑬ 松山寺跡地と地蔵尊

松山寺(しょうさんじ)、敷地一畝十八步。寄附人豊田定八となっており除地高二百文が与えられていた。明治六年廃寺届となつてゐる。地蔵菩薩は現在道下(みちのした)にあり「名春貞松(めいしゆんていしょう)善女」の戒名が見える。松山寺は、えんげじとも呼ばれてきたかもしれない。
 尚、虚空蔵菩薩は松山寺の本尊と伝えられる。ある時虚空蔵さんがある人の夢枕に立ち「もっと広い世界を見たい」と言つたため、藤川の対岸沢間の明星山虚空蔵尊堂に移されたという言い伝えがある。



虚空蔵さん あき風(あきかぜ)に乗り お引越(おひこ)し

⑭ 東泉庵跡地並びに観世音

東泉庵。観天寺末寺。創設年度不詳。本尊は薬師如音来。検地石高二百文が与えられていた。敷地二畝十八步。寄附人小田藤五郎となつてゐる。明治六年六月十五日観天寺に合併した。本尊薬師如来は観天寺に祀られている。敷地は道路拡張により狭くなつたが屋敷の片隅に自然石に刻んだ「南無観世音」の石碑がひっそりと往時の名残を留めている。



藤川古跡巡りマップ



⑮大井神社並びに天神社

大井神社創設延喜十二年十二月七日鎮座。祭神は水波能売命(みずのはねのみこと)。除地高六石、御神体として藤原吉重名入直径六寸唐鑄の鏡がある。祭日は一月五日。明治四年十一月四日夜焼失し(⑪天王社参照)、今の神殿は明治七年再建したものである。天神社創設は大井神社に同じ。文久二年現在地に移る。祭神は天穗日命(あまのほひのみこと)。祭日同じ。除地高一斗九升。代々澤田家が祭主。明治六年合併。

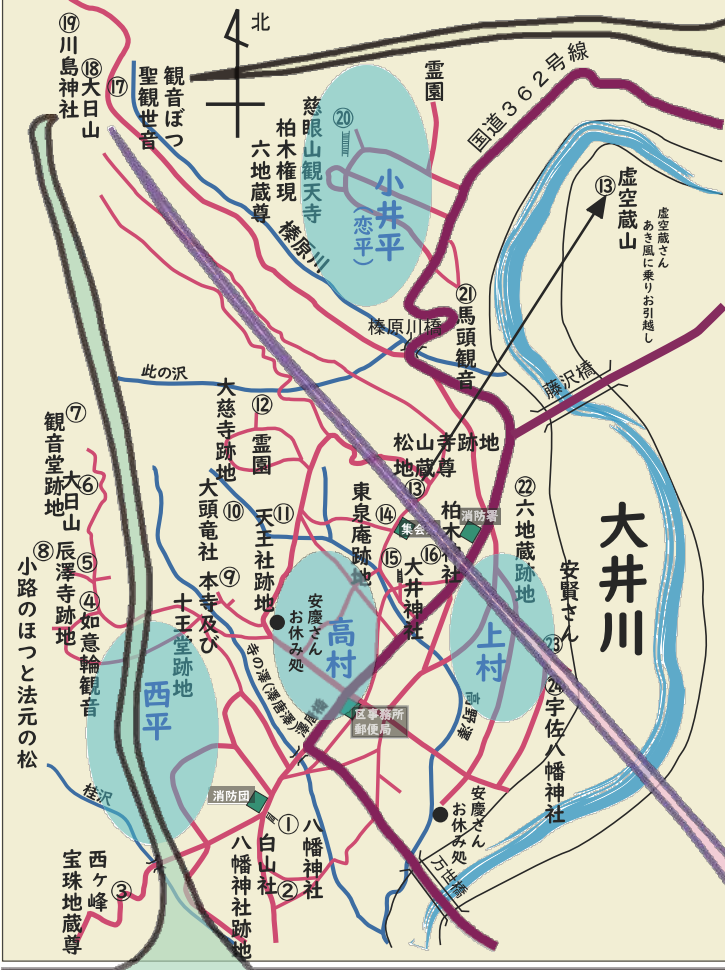


⑯柏木神社

寛文二年二月島田代官長谷川藤兵衛により遠州藤川村の検地が行われ夫々寺社に対する除地高が決まった。其の際個人の屋敷内にある寺社は対象とならなかった。この柏木大神は柏木権現の分霊でありながら屋敷根の為無禄であった。



藤川古跡巡りマップ



17 観音ぼつ聖観世音

南朝宮方の武士や天台宗山門派の僧兵が山伏姿に身をやつして辿ったであろう信州街道の観音ぼつにて、今から二百年ほど前享和元年、山犬に咬み殺された人を悲しまれて植田家祖先の甚三郎翁が建てられた。対岸の高台が恋の代柏木権現の堂宇のあった処。この信州街道は板取山、蕎麦粒山、千石平、戸中山、奈良代山を経て信州へ。



19 川島神社

今の小井平がまだ「恋平」と呼ばれていた頃の物語。藤川の奥地へ犬を連れて狩りに出掛けた夫が大雪に降り込められついに帰らず。妻柏木は「恋の代」にて待ちわびつつ果てたという悲哀の物語り。遭難の場所と云われる西谷の川の中に岩山があり、そこに夫は「川島神社」として祀られ小さな祠が建っており往時の悲話を伝えている。



18 大日山(日向山)

大日山は榛原川林道の日向橋を越えて山道を二百米(メートル)位登った処にある。西谷、鹿の沢方面に通ずる主要山道。炭焼、植栽、出材など多くの杣人が通った。此処に奇形石を御神体として多くの穴あき石が吊され祈願の形跡が見られた。登る人悉(ことごと)く安全を願って必ず手ごろの柴を手折りて持ち来たり神前に処狭しと挿し、安全を祈願し晴々として仕事に向かった。

藤川古跡巡りマップ



⑳ 観天寺、柏木権現、六地蔵

慈眼山観天寺は文正元年（一四六六）曹洞宗大源派門徒喜山の末流秀藤（しゅうとう）和尚により恋平の地を掘起こし、一体の金仏（かなぶつ）を得る。これ聖観音の像なり。この地に精舎を建て右一尊を安置し観天寺と号すとあり。以来五百数十年。二十三代目と聞いている。柏木権現は元「恋の代」に在ったと云われ寛文二年当時の記録に敷地十二歩藤五郎持（もち）と記されている。再建を重ねて遂次現在地に至ったものと考えられる。六地蔵に就いて建立は文政十二年（一八一八）組頭吉左衛門と甚之助さんが願

主となって石山家前三叉路付近に建立されたものを、明治六年寺社統廃合により現在地に移管されたもの。二体は台座が割れ平石となっており其の欠け座石が跡地に残っている。



柏木権現



観天寺



六地蔵

㉑ 馬頭観世音

馬頭観音は旧川根街道と観天寺参道の分岐点に「道しるべ」を兼ねて建立されていた。創設は明治四年一月一日小西米吉さんが愛馬の災難を嘆かれ、その供養の為建てられたものである。特徴は石仏の頭上に更に馬の頭が重なっている。町内にも十三の馬頭観音があり、夫々悲しい物語を秘めている。



馬頭観世音（頭の上に馬の頭が重なる）

百三十五年前明治四年一月一日
小西米吉さんが願ひて建立された

藤川古跡巡りマップ



②② 六地藏跡地

夜燈のみが残されて
いる。かつては、
近隣の人達が順番で
灯し続けていた。この
跡地に六地藏の蓮の
台座の欠けらが一つ
残り吉左衛門と甚之助
の名前が往時を物語
っている。



この台座に吉左衛門と甚之助の名

②④ 宇佐八幡神社

九州宇佐八幡の分身と聞く。寛文二年の検地の当時は個人の屋敷内にある神社仏閣は除地の対象とならなかった。元、大藤さんの屋敷内に在ったと聞き及んでいる。小田さんの柏木神社や澤村さんの大頭竜社と共に藤川区の名所として祀り称えて、ふる里に誇りを持ち郷土を愛する心のよすがとしたものである。



②③ 安賢さん

安慶さんは幕末より明治に掛けて川根地区を遊行(ゆぎょう)された僧侶だと聞く。特に藤川には縁が深く「安慶さんお休み処」と伝えられる場所が二ヶ所ある。病にて斃(たお)れ現地に祀られた。当初は「安慶さん」であつたが澄水(ちよすい)和尚より「安賢泰全靈士」の称号を贈られてより安慶さんは安賢さんに改称され現在に至っている。



— おわりに —

高本鷹一様の資料から「ふる里再発見 遠州藤川村古跡探訪記」として一部分を復刻いたしました。復刻に当たっては、多くの人たちの協力を頂きました。本来であれば協力いただいた方の全員の名前をここで挙げなければならぬ処ですが、紙面の都合もありお礼の言葉のみとさせていただきます。有り難う御座いました。

今一度、心を静かに先人達が作った「ふるさと」を偲び「藤川」の素晴らしい歴史に誇りを持って、子供達に明るい未来を示すことができるよう頑張りたいと思います。

生涯学習委員

横山育起・梶山幸子

令和二年十二月

宝篋印塔と五輪塔

今は墓塔・供養塔という直方体が多いが、昔は宝篋印塔（ほうきょういんとう）五輪塔が使われていたらしい。山神社に在った宝篋印塔は志登呂兵部崇信の墓

五輪塔

地輪は四角
水輪は円
火輪は三角
風輪は半月
空輪は宝珠形

宇宙の万物を構成する五元素

徳山には其の一節が残る

宝篋印塔

屋根部分上下に段数を重ね
四隅上端に花卉の突起をもつ塔

志登呂兵部崇信墓

宝篋印塔（陀羅尼を納める塔）

今ほもうないが樹齢千年と云われた大楠の木

古文書に曰く「神社の辰巳（南東）の方向に楠木あり是れ志登呂兵部崇信の墓云々」元は、此処にあったものを大井神社境内に移転したと思われる

『ふる里再発見』

遠州藤川村古跡探訪記

発行日 令和二年十二月二十七日

編集 川根本町藤川区生涯学習委員

印刷 松本印刷株式会社

本書の全部または一部を無断で複製・複製することを禁じます

主な参考文献

- 一、「遠州藤川村古跡探訪記附録」 「ふる里の歩み」 著者 高本鷹一
- 二、「中川根のむかし話」 編集 中川根のむかし話編集委員会
- 三、「川根本町の文化財」 編集 川根本町教育委員会

1坪は約3.3㎡ですが、正確に出したければ、0.3025で割ります。逆に㎡を坪に換算するときは、0.3025をかけます。

石高（こくだか）

江戸時代、土地の価値を米の量で表しそれを石高と云ったようです。米1合（ごう）は約180mlで150g（ご飯にして330gから350g）
10合→1升（しょう） 10升→1斗（と）
10斗→1石（こく、ごく）

土地の面積

江戸時代、土地の面積は町・反・畝・歩で表しました。1歩（ふ）は約3.3㎡で1坪（つば）量2量分。

30歩→1畝（せ） 10畝→1反（たん）
10反→1町（ちょう）

1合、1升などは、容積、体積の単位です。また田ばかりでなく畑、屋敷地なども米を作ったと仮定して（石盛（こくもり）というらしい）土地の面積を石高に換算したようです。